



ショートコメント

★★★★

Data 2021-136

監督：リドリー・スコット
 原作：エリック・ジェイガー
 『決闘裁判 世界を変えた法廷スキャンダル』
 脚本：ニコール・ホロフセナー、ベン・アフレック、
 マット・デイモン
 出演：マット・デイモン/ジ
 ヨディ・カマー

最後の決闘裁判

2021年/アメリカ映画

配給：ウォルト・ディズニー・ジャパン/142分

2021(令和3)年10月16日鑑賞

TOHO シネマズ西宮 OS

みどころ

弁護士の私にとって“決闘”と“裁判”は相矛盾する概念。しかし、中世ヨーロッパでは、妻の“強姦”をめぐって“決闘裁判”が行われていたそう。そりゃ一体ナニ？

外形的事実の一つでも、当事者の視点によってそれはいろいろ！しかし、本作は強姦？それとも和姦？その事実認定は難しい。

「Based on the true story」とされている“決闘裁判”の姿を、三当事者による三様の視点からしっかり検証したい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆“決闘裁判”って一体ナニ？弁護士の私には、“決闘”と“裁判”は完全に矛盾する概念だ。したがって“モノのたとえ”としての概念、表現ならまだしも、そんなあいまいな概念を邦題にするのはいかがなもの？ちなみに『グッド・ウィル・ハンティング』（97年）以来の盟友（脚本仲間）であるベン・アフレックとマット・デイモンの脚本を基に、巨匠リドリー・スコットが監督した本作の原題は『The Last Duel』（最後の決闘）だ。また、原作はエリック・ジェイガーのノンフィクションの「決闘裁判 世界を変えた法廷スキャンダル」だ。

ちなみに、本作のチラシには、「決闘裁判とは・・・」として次の通り解説されている。

中世ヨーロッパで広く行われた、決闘によってどちらが正義かを決定する裁判。神が正義の者を勝利に導くと信じられていたため、敗者は決闘で命を奪われなかったとしても、罪人として処刑される。この映画で描かれた決闘裁判は、フランス王国が認可した<最後の決闘裁判>となった。

◆本作のチラシには「リドリー・スコット監督が挑む、衝撃の<実話>ミステリー！」、「生死を賭けた<真実>が裁かれる」、「それは歴史を変えた世紀のスキャンダル」、の見出しが躍っている。また、チラシに紹介されている本作のストーリーは次の通りだ。

中世フランス、騎士ジャン・ド・カルージュ（マット・デイモン）の妻マルグリット（ジ

ヨディ・カマー) が夫の旧友ジャック・ル・グリ (アダム・ドライバー) に乱暴されたと訴える。だが、ル・グリは無実を主張し、目撃者もいない。真実の行方は、カルージュとル・グリによる生死を賭けた「決闘裁判」に委ねられる。それは、フランス国王が正式に認めた、神による絶対的な裁き — 勝者は正義と栄光を手に入れ、敗者はたとえ決闘で命拾いしても罪人として死罪になる。そして、もしも夫が負ければ、マルグリットまでもが偽証の罪で火あぶりの刑を受けるのだ。

◆私はこの手の「中世の騎士もの」が大好き。本作冒頭は、鎧兜姿のジャン・ド・カルージュとジャック・ル・グリが馬にまたがり、世紀の決闘にのぞむシークエンスだ。1976年のアントニオ猪木 VS モハメッド・アリによる世紀の“異種格闘技”対決は平凡な引き分けに終わったが、この決闘に引き分けはありえない。さあ、その展開と結末は？

弁護士の仕事を手を50年近くやっていると、事実の認定がいかに難しいかがよくわかる。とりわけ、強姦事件は難しい。殺人事件で、殺意の有無が争点になった場合も同じだが、強姦事件では、無理やりなのか(強姦)、それとも合意の上なのか(和姦)の判断は難しい。もっとも、全面否認の場合でも、男女が2人でいたこと自体は認めるの？行為があったこと自体は認めるの？等々、“争点の整理”が重要だ。本作での、その点はいかに？

ベテラン弁護士である私の目には、決闘が許可される前の、裁判におけるその争点整理が不十分だと思われるのが少し残念だが・・・

◆本作は3つの章に分かれているが、それは一つの事実を強姦事件の“当事者”であるマルグリットとジャック・ル・グリ、そしてジャン・ド・カルージュ、3人の視点から別々に描いたため。つまり、一つの事実といえども三者三様のとらえ方によって全然異なり、一方の主張は強姦に、他方の主張は完全否認(和姦?)になるわけだ。そこで思い出したのが、韓国のホンサンス監督。私は最新作『シネマ49』に、「韓国のホンサンス監督作品、新旧3作」を収録したが、彼は20年間一貫して男女の恋愛をテーマとし、1つの事実を2~3つの異なる視点から描く映画を作ってきた。彼はまた、亡くなったキム・ギドク監督と共に「早い、安い、うまい」という“吉野家路線”の実践者だ。考えて見れば、実は日本の巨匠・黒澤明監督の『羅生門』(50年)もそれだった。つまり、外形的事実の大部分は共通していても、細部に入ると少しずつ食い違い・・・。人間の内心の問題になると、さらに食い違い・・・。それが男女の心の問題になると、さらに食い違い・・・。

◆さあ、本作についての三者三様の言い分をしっかりと確認した上での、あなたの事実の認定は？もっとも、それはすべて国王の判断に委ね、観客としての私やあなたは本作の展開をたっぷりと楽しみたい。それにしても、こんな名作の観客はガラガラ。同じ日に観た『燃えよ剣』は満席だったのに・・・。

2021(令和3)年10月22日記